
東方癒式猫

霧夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方癒式猫

【Zコード】

Z2275BA

【作者名】

霧夜

【あらすじ】

ある日、なぜか白い猫又に転生してしまった主人公。彼は、東方の世界で何をして、誰と会い、何を思うのか？

東方の二次創作小説です。キャラ崩壊、オリキャラ介入などなど、二次創作要素満載です。苦手な方は、ブラウザバックをおすすめいたします。

プロローグ（前書き）

また、KSみたいな小説を書いてしまった。

プロローグ

「…………？」

そんなことを呟く僕は、……えつと……名前なんだっけ？
まったく思い出せない。何でこの森の中にはいる前の記憶がないんだ？……へ、なにこれ？新手の嫌がらせ？それとも、何かのテンプレか？……とりあえず落ち着こう。もひとつ。それよりも、気になるのは……。

「とりあえず……。のど渴いたし、水を探すか。」

そんな事を言いながら水を探し始める僕。本当にのどが渴いた訳ではない。ただ単に落ち着きたかったのである。

見つけた。ビックセイ湖のようだ。周囲は、草木に囲まれている場所だ。

「うん。水美味いけど……。何で猫になってるんだ？」

さつきから、どうも視線が低いと思つたんだよね。ビックセイ湖のようだ。しかも……。

「尻尾が一本あるんですけど……。」

思い当たるのは、『猫又』

『猫又』

猫股とも書く。年を取った飼い猫が変化した妖怪。^{へんげ}
葬儀場や墓場から死体を盗み、その人間になり替わったりする。
黒猫の猫又が最強と言われる。
普通の猫の姿をしているが、扉の開け閉めが両方できる猫が猫又
と言われる妖怪である。

「……まあ、僕は、白だから最強じゃない訳だ……。まあ、

人間だつた時も平和主義を貫いてたからちょうどいいか。」

そんなこんなで僕の妖怪ライフは、始まりを告げたのであった。

プロローグ（後書き）

短いですね。この序説などあいまつたらお気軽にお寄せください。

鬼なんですか、そうですか（前書き）

今回、結構時間。

鬼さんですか、そうですか

前回から一〇年という月日が過ぎた。・・・え？ 何でそんなに時間が流れているかつて？ ・・・ふつそれを気にしたらダメというものがだ。

とりあえず、僕の能力？ といつ物があることが判明した。その名も『人を和ませる程度の能力』・・・え？ なにこれ・・・弱くね？ まあ、平和的でいいか。そして、結構妖力？ という物の操り方も覚え始めた。

そんな事よりも、もっと驚くべきものを発見した。それは人間の住む村だ。どうやら僕は、タイムスリップ？ もしたみたいで、豊穴住居である。うん。初めて見たとき僕も驚いた。

「まあ、人間に会いに行つてみるか・・・。」

そう言つて僕は、四本足で人里へと走り出す。・・・ああ、いまさらだけどなんか身体能力が凄いみたいで五十㍍三秒台で走れた。

「なにこれ？」

そう言つしかなかつた。なぜなら、人里で暴れまわる一人の男性。年齢は・・・二十歳くらいだろうか・・・。周りの人間なんか、

「うわー。」

「に、逃げる！ ！」

こんな声上げて逃げ回っている。僕も逃げようかな。ちょ、男の人こつち向いたけど・・・。

「お前は何者だ？」

ヤバイ。マジでヤヴァイ。完全にこつちを獲物を見つけた目で見てくるんだもん。

「ニヤア～。」

とりあえず、猫の振り・・・そだ猫の振りだ。これこそ、逃げるための手段だ！！

「『まかすな。妖怪。』

＼（^へ0^）／ オワタ

「あ、ばれた？」

「当たり前だ。鬼を見くびるなよ。」

ヤバイ睨みながら言つてくる。ハツキリ言つて怖え～。ああ、そ
うだよ、僕は、チキンだよ！チキンで悪いか～！

「・・・獸がしゃべつたら変だと思つてね。」

「獸？・・・まあ、いい。俺は、鬼の神鬼戦真しんきせんまだ。お前も、名を
名乗れ！」

「ごめん。名前無いんだ。種族で名乗ると『猫』まあ、『猫又』
だがね。」

僕は、クツクツと笑つて見せた。それが氣に入らなかつたのか戦
真はムツとしたがすぐに、

「『猫』？『猫又』？そんな種族、聞いたこともないし見たこと
もないぞ。」

「・・・は？」

怪しきなつて周りを見渡してみると人間も首を傾げている。猫を
見たことがない？そんな馬鹿な。・・・まあ、いいか。

「それより、僕に何かようですか？」

「・・・とぼけるな。そんな妖力を持つて俺の前に現れたということ
ことは分かつてゐるだろう。」

「全然わかない。」

「・・・。」

ヤバイ。とぼけてみたら頭抱えられた。

「・・・。それだけの妖力を持っていたら、鬼である俺が戦いたくならない訳がないだろ?」

「やりと笑いながらこっちに尋ねてくる。

「つまり・・・。戦いと?」

「そのとうりだ。」

「ああ~。空が青いな~。」

「てつ、おい。とぼけるな!!」

とぼけたら突っ込んでくれた。え、もしかしていい人!???

妖怪か。

「・・・帰つてもいいですか?なんか、くる場所間違えたみたいなので。」

「逃がすとでも?・・・てつ、おい!!」

とりあえず、にげてやったNE 三十六計逃げるにしがずつてな。

・・・森の中・・・

「待てや」「フー!!」

「待てと言われて待つやつがいるか!!」

「じやあ、逃げるな!!」

「同じじやねーか!!」

そんなことを言いながら鬼から逃げるために僕は、絶賛逃走中である。あいつ速いし。僕に普通についてくる。てか、なぜこの状況で田の前に崖あるし!

「さあ、追い詰めたぞ。おとなしく戦え。『猫又』ヒヤウ。」

「分かつたよ!! 戦えばいいんだろ!!」

「そのとつりだ。」

「いくぞ!」

勢いよく「ぶしが飛んでくる。僕は、紙一重でその「ぶしを避け

た。こぶしが地面に当たるとそこがクレーターのようになっていた。

「そんな威力ありかよ・・・。しかも、能力もちだな？」

「ほう、よく分かつたな？その通り、俺の能力は『力を調整する程度の能力』だ。」

「チートだな。」

さて、どうしよう？

-数刻後 -

やあ、まだ交戦中なんだ。でも、勝つ方法が浮かんだ。

「いつまでも避けてるんじゃ勝つことは・・・グフ。」

とりあえず、一蹴りしてやつた。そして、妖力弾を放つ（もちろん手加減なしの）。

「そんな物・・・・く・・・。」

命中した瞬間戦真は倒れ掛かった。その瞬間にぼくは、一番大きな妖力弾を頭上に作り出す。

「・・・くつ、まだ終わら・・・『いや、終わりだよ。』・・・な！？」

気づいたところでもう遅い。僕は、すでに妖力弾を投げていた。

「えつ、ちよ！？」

命中した。

鬼なんですか、そうですか（後書き）

今回無理やり感が半端じゃない・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2275ba/>

東方癪式猫

2012年1月5日21時52分発行